

失われた十部族:発見されています

2001年1月 アシェル・イントレーター

イスラエル王国が最盛期を迎えたのはダビデとソロモンが王であった時代で、イエシュア(イエス)の時代より約1000年前でした。ソロモンの息子レハブアム王が統治していた頃、イスラエルの北十部族はユダ族とベニヤミン族から切り離されてしまいました。したがって、王国は北イスラエルの十部族と南ユダ部族とに分かれてしまいました。

この分割は、将来メシアによって再統一される(エゼキエル 37:12)という希望の対象となりました。これにはまた、北イスラエル部族は諸国の教会を、ユダ部族はユダヤ人とイスラエル国家を表す象徴的な意味もあります。しかし、これら2つの見方は預言的、象徴的ではありますが、歴史的、系図的なものではありません。

イスラエルの北十部族は紀元前8世紀にアッシリアによって捕囚となり、南ユダ部族は6世紀に捕囚となりました。聖書の記録によりますと、ユダの捕囚たちはイスラエルの地に、紀元前5世紀に戻っています。

北十部族の回復については、主だった説明がないため、年月を経るごとに次のような疑問に対する見解や興味が湧き起こってきました。「失われた十部族はどこにいるのか。」

興味深くはあるものの、危険な傾向は、多くのキリスト教的カルトグループが、自分たちこそ北十部族の子孫であると主張していることです。この主張は日本からアメリカ原住民にまで及びます。モルモン教やエホバの証人の中にも、同じような主張があります。さらにこの主張はクリスチャン・シオニスト運動の一部にも影響を与えています。

事の真相は、今や失われた十部族は存在しない、ということです。イスラエル王国の分割と捕囚の時代を通じて、北王国の各部族の数パーセントは南に下り、ユダの地に住み着きました。それ以降、ユダやユダヤ人という名称は、特にユダ部族のみを指すのではなく、ベニヤミン族、レビ族、そしてすべての北部族の残りの人々全体を指すようになりました。

今や失われた十部族は存在しないのです。イスラエルの全部族は、現代においてユダヤ人と呼ばれる人々の中にすべて含まれています。この立場を証明する7つの聖書的な証拠があります。

1) ユダにおけるイスラエルの残りの人々(第Ⅱ歴代誌)

第Ⅱ歴代誌には何度も、イスラエル王国の分割後、北部族の人々がユダに移住したことを記録しています。これは、南北分割の時点からすでに生じています。

Ⅱ歴代誌 10:16-17 「こうして、全イスラエルは自分たちの天幕へ帰って行った。しかし、ユダの町々に

住んでいるイスラエル人は、レハブアムがその王であった。」

北イスラエル部族の一部がユダの領地に住んでいたことを、これほど明白に表しているものはないでしょう。第Ⅱ歴代誌 11:3 には、レハブアムはユダだけでなく、ユダとベニヤミンの地に住んでいる全イスラエルの王と述べられています。第Ⅱ歴代誌 11:16-17 には、「イスラエルの全部族の中から、その心をささげてイスラエルの神、主を尋ね求める者たちが、その父祖の神、主にいけにえをささげるためエルサレムに出てきた。」と述べられています。

第Ⅱ歴代誌 15:9 には、アサ王によるリバイバルの時、「イスラエルから多くの人々が」ユダにやってきたことを教えてくれます。第Ⅱ歴代誌 24:5 には、イスラエルの全部族から集まってきたそれぞれの部族に属する者について言及しています。第Ⅱ歴代誌 30:21 と 25 には、ヒゼキヤ王の時代に、ユダにやってきたイスラエルの子らの話が出てきます。第Ⅱ歴代誌 31:6 にはまた、ユダの町々に住み着いたイスラエルの子らのことが述べられています。

第Ⅱ歴代誌 30:11 には、アシェル、マナセ、ゼブルンの人々の一部がエルサレムに上って行ったことが書かれています。第Ⅱ歴代誌 30:18 にはまたエフライム族とイッササル族の人、第Ⅱ歴代誌 34:6 にはシメオン族とナフタリ族が加えられています。第Ⅱ歴代誌 34:9 には明らかに、アッシリアの捕囚の後、エルサレムに住んでいた「すべてのイスラエルの残りの人々」について述べています。第Ⅱ歴代誌 35:3 にはまたユダに住む「全イスラエルの人々」について述べられています。

2) 捕囚からの帰還(エズラ記とネヘミヤ記)

バビロン捕囚の後、イスラエルはエズラとネヘミヤの指導のもと、回復しました。この 2 つの書には長い系図が記録されています。事実、この綿密な系図の記録が証明することは、北イスラエルの人々が国家の回復の一部であっただけでなく、自分の家族の記録を保持しており、自分がどの部族出身であるかを知っていたということです。エズラ記 2:2 は「イスラエル民族の人数」から記録が始まっています。エズラ記 2:59 が物語っているのは、人々は自分が北イスラエル部族のどの部族出身であるかだけでなく、どの家の者であるかをも証明する特別な系図を持っていたということです。それは、「自分たちの先祖の家系と血統がイスラエル人であったかどうかを証明する」ものでした。記録は持っているが完全なものではない者は、イスラエル人と認められず、ウリムとトンミムによる超自然的な証明を待たねばなりませんでした(もしそんなことがあればの話ですが)。いかに大半の家族の記録が綿密に、良く記録されていたことでしょうか。(エズラ 2:62-63)エズラ記 2:70 には再び「すべての」イスラエル人は、エズラとネヘミヤによる国家の回復後、ユダに住み着いたと述べています。

エズラ記 6:16 と 21 には、「捕囚から帰ってきたイスラエルの子ら」についてはっきり述べています。エズラ記 7:7、9:1、10:1、10:25 には、イスラエル人と外国人との雑婚の問題について述べられています。

ネヘミヤ記 7:7-73 にはエズラ記 2 章で記録されたイスラエル諸部族の家系図が繰り返されています。ネヘミヤ 9:2、11:3、11:20 には「ユダの町々にいるイスラエル人の残り」について述べられています。ネヘミ

ヤ 13:3 には、イスラエルの系図が混乱しないよう、外国人を取り分けたと述べられています。

3) アンナの証(ルカ 2 章)

ルカ 2:36 には、アシェル族出身として女預言者アンナが記録されています。アシェル族は北イスラエルの最も北の、最小の部族でした。言い換えますと、新約聖書の中には明らかにイエスの時代、イスラエルの北十部族からの人々もユダヤ人としてみなされていたことが分かります。彼らはどの部族出身かを示す系図を持っていました。

たとえば、新約聖書の時代、アンナが自分はアシェル族の子孫であることを知っていたならば、アシェル族が、イエスの時代より 700 年前に「失われていた」というのはどういうことでしょうか。

4) イエシュアと使徒たち(4福音書と使徒行伝)

イエシュアはイスラエル全土で教えました。主はユダヤ人に向かって語りました。主のすべての教えにおいて、主はイスラエルの全ての子孫たちに向かって語っていたと推測されます。イエシュアは1度として、他のグループやイスラエルの失われた部族がどこかに漂流している可能性について述べていません。紀元1世紀に、ユダヤ人に教えられた際、イエシュアが言われたことは、主は「イスラエルの家の滅びた羊の家」に遣わされたということです。(マタイ 10:6)

同じように、紀元1世紀に、使徒たちはユダヤ人の群衆に、彼らは皆イスラエル全家の子孫たちであるということを前提に語りかけました。使徒 2:22 にペテロはエルサレムに住む「ユダヤ人」に向かって「イスラエルの人たち」と呼びかけました。ペテロは群衆に向かって「イスラエル全家の人々」で教えを締めくくりました。(使徒 2:36) 言い換えますと、ペテロの目には、紀元1世紀のユダヤ人は、イスラエルの全部族が含まれていたのです。ペテロはこのようにして、他の教えに際しても、群衆をイスラエル全家の人々と表現しています。(使徒 3:12、4:8、4:10、4:27、5:21、5:31、5:35、10:36)

パウロもまた紀元1世紀のユダヤ人に対して「イスラエルの人々」と呼びかけています。(使徒 13:16) 彼は、自らが語るメッセージすべてにおいて、一貫して、ユダヤ人をイスラエル人と現わしています。(使徒 13:23-24、使徒 21:28、使徒 28:20) 12 人の使徒たちは「12 の玉座に座り、イスラエルの 12 部族を裁く」将来の指導者として見られていました。(マタイ 19:29)

ヤコブ書の 12 部族

ヤコブの手紙は、「国外に散っている 12 の部族」に宛てています。(ヤコブ 1:1) 彼は一部の失われた部族に語ったのではなく、紀元1世紀の、分散しているイエスを信じるユダヤ人の聞き手に向かって語ったのです。

ヘブル書を見ると同じ議論が当てはまります。ここで「ヘブル人」と呼ばれている集団は、日本やアメリカ

原住民の部族を指しているのではなく、紀元1世紀のユダヤ人を指しています。

イスラエルのレムナント(残りの人々)(ローマ 9-11 章)

この議論は、ローマ書 9-11 章に述べられているイスラエルのレムナント(残りの者たち)であるユダヤ人信者の回復についての約束を見る時、特に重要なものです。ここでパウロはイスラエルの子孫が救われることを祈っています。この、回復されるべきレムナント(残りの者たち)とは、聖書が一貫してその回復を預言してきたイスラエルのレムナント(残りの者たち)のことであり、これらの預言を成就させる人々のことです。彼らは紀元1世紀にイエシュアを拒絶した人々なのです。そして、主を拒絶したのは失われた部族などではなく、その時代、まさに1世紀当時イスラエルに住んでいたユダヤ人たちなのです。

主なる神はイスラエルの人々をお捨てになっていないとパウロは述べました。(ローマ 11:1)恵みによって、イスラエルにはレムナント(残りの者たち)が存在するのです。イスラエルは追い求めていたものを獲得できませんでしたが、選ばれた者は獲得しました。(ローマ 11:7)イスラエルがつかずいたのは諸国の民が救われるためでした。(ローマ 11:11)イスラエルの回復は、死者からの復活となります。(ローマ 11:12、15)

ローマ書 9-11 章のドラマは、現代ユダヤ人として知られている人々のことを語っていると考えた場合にのみ辻褄が合うのです。もし誰かが、これがモルモン教やエホバの証人、あるいはクリスチャン・シオニスト、またはその他の原住民のことを語っているのだと解釈するならば、この御言葉の全体の意味が失われてしまいます。そのような視点は主なる神のイスラエルに対する約束、イスラエルでの宣教目的、終わりの時にイスラエルと教会を再統合させる意味について破壊させてしまうでしょう。

7) カルト的な視点

多くのカルトグループが、自分たちこそ「失われた」十部族の一部であるという結論に達することは、決して偶然ではありません。そのような視点は彼らの信徒たちを混乱させるものであり、御言葉に照らして不正確なものです。そのような神学は、メシアであるイエシュア(イエス)の再臨に至るイスラエルの回復についての預言を理解しようとする上で、危険な欺きとなるのです。